

日本語と英語：言語の成立と文化の特徴

田中，長子

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

92

(開始ページ / Start Page)

103

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005490>

日本語と英語

—言葉の成立と文化の特徴—

田 中 長 子

美術専攻のアメリカ人女子学生が初めて日本を旅行した時のこと、電車の中の吊広告に書いてある日本語に大変興味をそそられた。その字をじっと眺めているうちに、イメージが湧いてきて、まるで絵画を分析するように、言葉の意味がわかった気がしたという。そのことを確かめたくてホームステイ先の家族に、その日の日本語との出会いの話しをした。吊広告の絵の説明をし、その横に書いてあった日本語、特に漢字の部分の解説を詳しく話して聞かせ、こういう形だからこういう言葉じゃないかしらと推測をまじえながら次々に漢字の意味を当てていった。家族がおもしろがって、逆に、簡単な漢字を紙に書いて意味を予測させたところ、ほぼ正しい答えが帰ってくるので、その女子学生の頭の良さに感心すると同時に日本語は世界一難しい言語だと思っていたのに不思議な感じがしたという。

この話しを聞いた時、表意文字としての漢字の特徴をこの学生は捉え、その象形である絵や形を連想して言葉の意味を解釈しているのではないかという疑問がわいた。尋ねてみたところ、やはり、象形文字を作り出した人々の発想と逆の連想をして漢字の解読をしていたことが判明した。この美術学生にとって簡単な漢字は自然を模倣したイラストレーションやグラフィックデザインと同じ感覚のものだったのである。絵画的思考で処理することによって異国の文字をまるで暗号を解くように簡単に判読していたのである。

この話しは私にヨーロッパでの苦い体験を思いださせた。ドイツ語をまったく勉強しないで初めてドイツに渡った時、見るもの聞くものすべてチンプンカンプンで右往左往したことを。英語やドイツ語のようにアルファベットの組み合わせでできている言葉は、初心者が文字を見つめただけでは何のイメージも湧いてこない。じっと穴が開くまで見つめていても、そこには単語を作っているアルファベットがただ順序よく並んでいるだけ。残念ながら外形から内容と

意味を予測することはできない。日本人の芸術家の初体験が私と同じ状況になるかどうかかわからないが、アルファベット言語すなわち音素 (Phoneme) を基本にした表音言語は、初心者にも少なくとも予備知識がない限り、見ただけでは全然理解できないのである。例えば apple という名詞の場合、最初に単語の意味を調べ、外形と内容を理解し、実際に食べてみることで初めて日本語の「りんご」と同じものだということがわかる。発音を真似ることで聞き取りも可能になる。単語の集合体である文章の場合は文法で裏打ちして初めて正確に文章が読めたり書けたりするようになるのである。

先にあげた美術学生の体験と私の体験が正反対なのは言語の性格の相違で生じた現象、言い換えると、言葉の表記システムの違いが原因で起きたといえる。拙論で、表音文字に属す英語と象形文字の流れをくむ表意文字に属す日本語の違いを言語学的に考察してみたい。その方法として、通時言語学の観点から、言語成立の歴史的考察を、共時言語学の観点から、文の構造と機能を比べてみたい。Sapir-Whorf 仮説⁽¹⁾ という言語学理論によると、その国の独自の言語が人の精神や思考に影響し、その国固有の文化を生み出すものであるという。この説によると、日本語が日本文化の特徴を作り、英語がイギリス文化の特徴を生みだしていることになる。上述の美術学生と私の体験から英語という表音文字による文化の世界を〔聞く文化〕と捉え、表意文字による日本語文化の世界を〔見る（読む）文化〕と捉えることができる。この〔聞く文化〕と〔見る（読む）文化〕の特徴を言語を調べることで論じてみたい。

1. 日本語の歴史

日本語は日本国という4つの大きな島と多数の小さな島々からなる国で使われている公用語である。日本列島に住んでいる約一億二千万人がこの言葉を用い、話したり書いたりしている。日本列島には民族の違うアイヌ人、中国人、南北朝鮮人などが古来から住んでいるが、公用語として日本語を使用している。日本列島以外では、移民の人々が住んでいるブラジル、アメリカ、ペルーなどで、日本語が日系人の第二言語として使用されている。台湾、韓国、北朝鮮、中国、フィリピンなどかつて占領地になった国や地方の中に日本語を第二言語として話せる人々がいる。

日本語は日本列島に古来から独自に存在していたのだろうか？ それとも一

番近い隣国である中国、台湾や朝鮮半島から輸入され借用された言葉なのだろうか？ それらの国々とは大昔から交流が盛んで人々の行き来が頻繁だったため、いろんな道具やもの、文化などが流入した。その痕跡が日本の各地各分野に現在も残っている。ここで現存する文献から交流の歴史を調べることで、漢字の伝来を明らかにしてみたい。

大陸において日本のことが記録されている最古の歴史文献⁽²⁾は、西暦一世紀に中国で書かれた『漢書地理志』である。百余国に分かれている倭人のことが記されている。続いて『後漢書東夷列伝』に倭の奴国が57年に奉貢朝賀し、後漢の光武帝から印綬を賜った話だが、107年には倭国王が安帝に奴隷を献上したことが記載されている。『魏志倭人伝』には、「邪馬台国」、「卑弥呼」の名前が登場し、二、三世紀ごろの倭国の状況や官位制度などがかなり詳しく書かれている。

反対に大陸から日本にもたらされた記録は、西暦285年に、初めての漢字の本『論語』と『千字文』が、百済王から大和政権に献上された。漢字の渡来の記録としてはこれが最古の記録である。儒教学者王仁^{わに}が王の命令で、本を携えて来日し、儒教を教えた。漢文も伝授した。実際に倭人が書いた漢文の手紙が残っている例として、478年に倭王武（雄略天皇）が宋の皇帝に遣使を送り、上表文を提出した記録が『宋書』に記載されている。

もう一人漢文を伝授した人物が明らかな記録は、513年に段楊爾^{なんように}という名前の中国人儒教学者が百済王から派遣され、五経（易経、書経、詩経、春秋、礼記）の講義をした。その後も学術諸分野の学者が次々に来日し、易学、暦学、医学、薬学、礼学などを教え、学問および文化の基礎作りと発展に大きく貢献した。

538年に百済の聖明王が金色に輝く仏像を欽明天皇に送り、それまでに渡来人や渡来僧によって伝えられていた仏教思想が朝廷に保護され、布教および信仰の速度が加速された。557年には仏像製作や寺院造営のため、僧侶や、鳥仏師、寺造り職人などが来日し、588年には寺院建築の専門家たちが百済王によって派遣され、飛鳥仏教文化の花開く準備が整った。聖徳太子の出現や『日本書紀』、『古事記』の編纂を待つまでもなく、上述のように大陸との交流が漢文を媒介に進められた。漢字は日本で確実に定着していった。また逆にそのことは漢字が外交上必要不可欠の言語であったこと、上流階級の間では漢語の教養が必修とされていた事を物語る。それが712年の『古事記』や720年の『日

本書紀』の編纂に結実していった。漢字文化およびその背景となっている大陸の思想や文化は、やがて庶民にも浸透していき、日本文化の根幹となって現代までも生き続けることになる。

しかし日本語は漢字だけでできている言葉ではない。ひらがなやカタカナを併用する言語である。大和朝廷のころ、すでに漢字の音読みと訓読みが並行して用いられていた。『日本書紀』は音読みの漢文体で、『古事記』は訓読みの和文体で書かれている。訓読みの言葉は漢文の日本語訳として使用されただけでなく、日本人が日常的に使用していた言語だった。それはいわば日本語のルーツであり、古代日本語である大和言葉であった。渡部昇一氏は、中国から直接導入された外来語としての漢字と違って、訓読みで使用された大和言葉は日本民族古来の精神を、日本民族の魂を表す言葉だと『日本語のこころ』の中で述べている。そして漢語と対比することによって大和言葉の美しさ、やさしさ、柔らかさ、母のように暖かく包みこむ情緒的な感触を俳句や短歌を例に説明している。

ここで大和言葉とは何なのか。その系統はどこにあるのかという疑問が湧いてくる。これまで見てきたように、大陸の影響は漢語だけでなく、文化、思想、生活、全般に渡っていた。仮名文字は漢字を基に作り出された言葉だから、漢字の同系語にあたる。ということは日本人は漢字が導入されるまでは書き言葉を所有していなかったことになる。

漢字が中国殷の時代に甲骨文字として実用化されたのは紀元前十六世紀のことだから、一、二世紀に日本に伝播するまでに莫大な時間を要している。漢字が大陸で普及し、盛んに使用されていたころ、日本はまだ縄文時代であった。縄文人の骨の測定を基に日本人の起源を解明した『日本人の起源』の著者池田次郎氏の大陸から移動してきた人々と縄文人は同じ人々ではなかったのだろうか？ なぜその時漢語という言葉と一緒に持ち込まなかったのだろうか。当時の話し言葉が大陸の言葉と同系語ではないとしたら、日本語の起源は何語になるのだろうか？ 祖語はどこにあるのだろうか？ 祖語も同系語も持たない完全に独立した言葉だったのだろうか、日本語は？ 鈴木孝夫氏が『日本語と英語』の中で言うように、言語を構成する要素のなかで音声構造が一番変りにくいとしたら、日本語は中国語や朝鮮語とは漢字の共通使用の点を除いて、同系語としての共通点が少なくなってしまう。音声構造が全く異なっているから。

日本語は表記法として構造の違う三種類の文字（漢字、ひらがな、カタカナ）を組み合わせる文章を書く。ひらがなとカタカナは表音文字の役目なので、仮名文字として一組に分類できる。すると日本語は漢字と仮名文字の二本だての言語となり、表意文字と表音文字の混合した世界でめずらしい独特の言語体系といえる。

大野晋氏は日本語の祖語の謎を解く言語学的研究に情熱を傾け、真実を求めて半世紀近く研究に腐心され、日本語の同系語が南インドのタミル語にあることを論証された。日本語とタミル語の文法構造の比較、音声体系の比較、語彙の比較（名詞、形容詞、動詞の比較を含む）、文化の比較（稲作、機織り、生活習慣、豊穡を祈る儀礼、死者を葬る儀礼）、詩の世界から精神世界まで丹念に比較され、非のうちどころのない言語学研究成果をあげられた⁽³⁾。氏の研究で謎だった日本語の起源が明らかになった。空白だった大和言葉の由来が明らかになった。

インドの北のサンスクリット語はインド・ヨーロッパ語族に属する英語、ドイツ語、デンマーク語、オランダ語等の同系語にあたり、同じ祖語をもつ。他方インドの南のタミル語が日本語の同系語に相当するとは驚きである。体系的には全く違う言語に分かれている英語と日本語だが、実はインドの国の方言として何らかの関係がある言語だったのかもしれない。タミール語の他にカンナダ語と日本語の五十音表記法もよく似ている⁽⁴⁾。

2. 英語の歴史

イギリスは日本と地理的条件が良く似ている。島国であること、隣の大陸の強い影響を受けていること等（文化面、言語面、精神面において）。言語の上でも二重構造を持つ。英語はラテン語系の言語とアングロ・サクソン系の言語を使い分けながら会話をしたり、文章を書いたりする。同系語がインドに存在する事も共通である。ここで英語の成立過程を英語史に照らし合わせ調べてみたい。ただし、ここでは英国の英語だけを対象にする。

(1) 現代の英語

英語は英国の公用語である。それは標準語（Received Pronunciation と呼ばれる容認発音が基本）⁽⁵⁾ と呼ばれ、BBC 放送のアナウンサーの英語やオク

スフォード大学、ケンブリッジ大学、パブリック・スクール、王室などで使われている洗練された英語がモデルになっている。また逆に標準語は学校の授業に使われ、公用語として報道関係や貿易関係などで使われている。アイルランドやスコットランドの公用語でもある。

現代英語は今や英国だけでなく、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどの標準語となっている。インド、フィリピン、香港などの公用語でもある。日本を始め、世界の多くの国々の国際語として外交、会議、物の売買等に大きな役割を果たしている。

(2) 古期時代の英語

古期時代の英語とは西暦 450 年ごろから 1100 年ごろまでの英語のことをさす。長い期間をようしてアングロ・サクソン英語 (Englisc) は成熟した。すこし詳しく古期英語の成立過程を歴史上の出来事と合わせてみてみたい。

紀元前 500-600 年ごろ、ケルト人の大移動が大陸で始まり、一部が英国に移住していたらしい。そのころの記録を残している最古のものはジュリアス・シーザーの『ガリア戦記』で、紀元前 55-54 年の英国征服の記録である。本格的な征服は西暦 43 年にクローディアスが 3 年がかりで成し遂げた。その後 400 年間ローマ人とケルト人は平和に英国を統治した。ローマ人がキリスト教を持ち込み、ケルト人もキリスト教徒になった。しかしゲルマン人の大移動が大陸で始まり、ローマの危機を救うため、410 年にローマ人はイタリアへ引き上げてしまった。

ゲルマン人の大移動の結果、五世紀にゲルマン民族の一族であるアングロ・サクソン人が大陸からイギリスに侵入して来た。ケルトの王ボルティゲルンは度重なるゲルマン人の攻撃に手を焼き、ゲルマン部族の一つであるサクソン人を頼んで、北と西から襲撃してくる他のゲルマン部族を退治させた。お礼にお金ではなくケントの近くの島を差し出した。島一つで満足しなかった強力なサクソン人は逆にケルト人を攻撃し始めた。約百年間戦争が続き、とうとうケルト人は英国の中心から追い払われた。ケルト人はアイルランドやスコットランドに逃れ、そこに国を築いた⁽⁶⁾。

ゲルマン民族の大移動の時、北ドイツのザクセン地方から移住してきたサクソン人はテムズ川の南側に定着した。北デンマークから来たジュート人はケント州へ、南デンマークから来たアングル人はテムズ川の北へ、北ドイツとオラ

ングからきたフリース人はフリージア諸島に定着した。4部族は同じゲルマン語を話し、互いに親密な関係を保ちながら共存していた。この4部族の事をアングロ・サクソンと呼ぶ。彼らは自分達の言葉のことをエングリスク（英語の原型 筆者注）と言っていた。それがイングリッシュの起源になった。

アングロ・サクソン人はケルト人が建設した大きな町や教会を壊し、自分達の小さな町を次々に作っていった。英国は7つの小さな国に別れた。北ウンブリア、メルシア、東アングリア、ケント、エセックス、サセックス、ウェセックスに。六世紀にケントが、六世紀後半から八世紀まで北ウンブリアが強い国になり、九世紀にはウェセックスが最強の国に発展した。

アングロ・サクソン人は書き言葉リューンズを所有していたがあまり使っていなかった。598年に聖オーガスティンがローマ字とキリスト教を伝えた結果、リューンズよりもローマ字のアルファベットを好んで使うようになった。またキリスト教も信仰するようになった。ここに英語の書き言葉が生まれた。当時の英語はゲルマン色の濃い、語形変化（屈折）の多い難しい言葉であった。

アングロ・サクソン人は八～十世紀に次々とバイキングの襲撃を受けた。最初バイキングは欲しい物を奪うと引き返したが、年を経るにつれて定住のための土地を欲しがった。851年にはカンタベリーとロンドンを占領し、870年にはウェセックスを除いた英国全土を支配下においた。

ウェセックスの王はアルフレッドといい、バイキングと戦うたびに負け続けたが、抵抗してなおも戦い続け、878年にやっと勝利することができた。その時の協定により、英国は二分され、西側はアルフレッド大王の国ウェセックスになり、東側はデーン人（アングロ・サクソン人はバイキングのことをデーン人と呼んだ。自分達もバイキングの末裔だったからなのか？）の領地になった。アルフレッド大王がデーン人と結んだもう一つの協定は宗教を持たないデーン人がキリスト教に帰依することであった。デーン人はその要求を飲みキリスト教に改宗した。

アングロ・サクソン人とデーン人はゲルマン系の言語を話していたので、多少理解しあうことができた。アルフレッド大王はウェセックスに住み、オールド・イングリッシュ（古英語）を話し、デーン人はデーンロー（英国の東半分；デンマークの法律に従う所という意味）に住み、オールド・ノース（古北欧語または古ノルド語）を話した。両方の国はお互いにゲルマン系の民族でゲルマ

ン系の言語を持っていたので、時々いざこざが起きるが、平和な時には交流が盛んに行われ、語尾変化（屈折）の少ない簡単な古ノルド語が、語尾変化の多い複雑な古英語に影響を及ぼし、古英語が語尾変化を失っていった。確かにある程度共通の言葉を持つ二人の人が話しをする時、一人が難しい語尾変化を文法上正確に表現し、もう一人ができない場合、影響力が強いのは簡単で省略できる側の言葉である。

デン人々が英国に定住するようになり、純粋な古ノルド語を使う率が低くなり、古ノルド語は古英語に吸収され消滅していった。いまでは場所の名前に古ノルド語の名残が残っているだけである。

このように英国の先住民族の言語ケルト語がラテン語と同化していき、ゲルマン語に取って代われ、それがまた同系語の古ノルド語を吸収合併し、簡単になりながら成長（現代英語に近づいた）していったのが古期英語と言える。

(3) 中期英語の成立

十二世紀から十六世紀までの英語は中期英語と呼ばれている。前半の300年間は激動の時代であった。英語にも大変革が起きた。1066年にノーマン人によってアングロ・サクソン王国が征服された。フランス北部のノルマンジーに住んでいたノーマン人（バイキング）が英国を統治したため、国中が大混乱に陥った。ノーマン人は支配階級のアングロ・サクソン人を解雇し、自分達が要職に就いた。そのため宮廷や町の主な場所でノーマン人の言語であるフランス語が使用された。英語の使用頻度はだんだん少なくなり、フランス語が公用語になっていった。フランス語が書けたり話せたりしないと職に就けないので、アングロ・サクソン人の間に急速にフランス語が広まった。英語は上流、中流の人に軽視され、下層階級の話し言葉に成り下がった。文章が書けない人々が英語の担い手になったので英語は低俗化し、簡単になっていった。中流以上の人や仕事に就きたい人達はフランス語を公の場で使い、家では英語を使うバイリンガル生活を余儀なくされた。こういう理由でこの時期に英語にフランス語が強く浸透していった。フランス語からの借用語が増えるにつれて、たくさんの英語の単語が死語となり消滅してしまった。文法も変化していき、語形変化が著しく減り、現在と同じ文章構造 SVC, SVO, SVOO に語順が定まった。

教会は元来ラテン語を使用言語にしていたので、フランス語の影響はさほど

受けなかった。また当時、重要な書物はラテン語で書かれていた。教養のある人々はラテン語の知識も豊富だったので、知識階級や上流階級の人々の中にはラテン語、英語、フランス語を自由に操れるトリリングルの人も多かった。当然、英語の中にラテン語とフランス語からの借用語が増えていった。英語はゲルマン語とラテン語とフランス語の入り交じった言語に変形していった。つまり英語はゲルマン語とロマンス語の混成言語になった。前者は庶民の言葉だったので比較的簡単な口語調に特徴が残り、後者は固い文語調に特徴を残した。ここに英語の単語の綴りと読みかたが一致しない理由の1つがある。また難しい語句とそれの簡単な言い換えであるイディオムの二重構造が生まれる一因にもなった。

土地を求めて侵入してきたノーマン人の社会は300年間続き、結局土地だけでなく、言語と文化も支配した。ノーマン王朝が終焉を迎えるのは英国在住のノーマン人とフランス在住のノーマン人の間でいざこざが起き、1337年に戦争(百年戦争)が始まったことに端を発する。

フランスのノーマン王朝に襲撃され、10年間の戦争で、人々が衰弱したところにペストが流行し、住民の3分の1が死んだ。支配階級の人に多く犠牲者がでたので、要職の穴を埋めるため、フランス語のできない下層階級の人を登用しなければならなくなった。こうして王宮の中で再び英語が話されるようになり、英語が復活していった。1362年に大法官庁(裁判所)が英語使用令を出し、1423年には議会が同じく英語使用令を出し英語が復権した。ノーマン王朝が弱体化するにつれて、フランス語は自然に使われなくなっていった。

フランス語という征服者の言語が無くなると、地方色豊かな方言の時代になった。方言の世界が中期英語後期の特徴である。ロンドン方言である東中部方言、南西部方言、南東部方言、西中部方言、北部方言が主要方言であった。

英語の父といわれた詩人チョーサーが『カンタベリー物語』を中東部方言で著し、初めて印刷術を導入したカクストンがその作品を本にして刊行したこと、ロンドンという政治、経済、文化の中心地としての地理的条件の良さ、ケンブリッジ、オックスフォード大学があること、大法官庁がロンドン方言を公用語に指定したことが手伝って中東部方言が標準語に昇格していった。

十五世紀から十六世紀にかけての中期英語後期の時代はノーマン人の征服のような侵略もなく、国内も安定していたので英語にさほど変化は生まれなかった。平穏な風潮は人々の関心を国内情勢に向けさせ、愛国心が芽生え、言葉

の重要性に気がつき、二度と外国語に占領されないことがないように学校教育の場で英語を教えることが義務づけられた。その結果、書き言葉の標準英語が完成した。これが中期英語後期の特長である。侵略者にもて遊ばれた英語に対する反省と反動から英語の国語としての重要性を認識し、書く英語の基礎を固めたのである。

(4) 近代英語の成立

英国では話し言葉としての標準語が十六世紀になってやっと確立した。当時のロンドンの宮廷や上流階級の英語、オックスフォードやケンブリッジ大学、パブリックスクールで使用されていた英語、文壇などの名士たちや役者が話す英語が、学校教育や文学作品を媒介に中流階級のあいだにも広まり、他の地区の共通語にもなり、標準語として認められていった。

歴史上関係のある出来事を見てみると、十五世紀に発明された印刷機の普及で、それまでの手書きで高価な写本がなかなか手にはいらなかったところに比べ、本が好きな時に簡単に安く購入できるようになった。ルネッサンスの影響を受け、向学心と娯楽を求めて人々が競って古典を読むことで、言葉に対する関心が深まり、言葉に鋭敏になっていった。時期を同じくして、シェークスピアが美しい正確な英語でおもしろい作品を沢山執筆したので、本の生産に拍車がかかった。また人々は劇場にあしげく通うようになり、演劇や文学が栄えた。この時期に母音に大きな変化が起きた。多分役者の発音の影響を受けたことが原因ではないだろうか？ それとも学校文法の確立や辞書の編纂の賜物だろうか？ 両方だろうか？

大陸のルネッサンスの影響は、ギリシア、ラテン時代の古典文化への回帰にとどまらず、宗教からの自由や人間性の開放をめざして英国文芸復興を起こした。人々が意欲的に勉学に励んだ時期でもあったので、ギリシア語やラテン語から夥しい量の借用語（外来語）が英語に入ってきた。この時期から二十世紀までの英語は近代英語と呼ばれ、現代英語とほとんど変わらない。

以上のように英語という言葉の変化を歴史を見ることで追求してきた。影のように言語はその言語を使用した民族に寄り添い、長くなったり短くなったり、消えてしまったり、また生まれたり歴史を作ってきた。言語の歴史は民族の歴史と切り離せない密接な関係を保ち、その時代の精神思考が言葉に表われた。それは Sapia-Whorf 仮説が説くように民族が言語を使って文化を紡ぎだ

した。

3. 言語変遷の特徴

古期英語の英語の変遷と民族の歴史、中期英語の言葉の変化と民族の歴史、近代英語の言葉の変化と英国の歴史は、いずれの場合も、異民族が英国に侵入すると、その異民族の言語が、侵入した地点から被征服民族の社会へ伝わり、英国全土にまるで波紋のように広がり、侵入者の言語と被征服者の言語が混ざり合っていた。この言語の浸透状態を言語学理論では「言語変化の波理論」(the wave theory of language-change)と呼んでいる⁽⁹⁾。ドイツのネオグラマリアンのヨハネス・シュミットが提唱した理論で、ソシュールの共時言語学の影響を受け、研究の師であるアウグスト・シュライヒャアーの「言語の家系図」の通時言語学的考察の欠点を補うために考えだされた理論であった。

この理論は言語の伝わり方に限らず、文化の伝わり方にも応用できる。英語を通時言語学に系統で見ると、英語はゲルマン語と同系語で、フランス語とラテン語も同系語である。英語、ゲルマン語、ラテン語、フランス語はインド・ヨーロッパ語族に属し、同じ祖語を持つ。また書き言葉(表記法)にアルファベットを使用し、表音文字による聞く文化を共有する。

日本語の場合は、漢字の伝播のしかたは「言葉の波理論」通りであった。漢字が伝わるとそれは同心円を描くように社会に浸透していった。しかし漢字の入りかたは侵略でなく、もっと友好的な借用(borrowing)の形をとった。そして歴史的に継承されていく形態も類推(analogy)によって伝えられた。戦争が起り、突然、政権が変わっても、同じ民族どうしの、より近い同系語(方言)の間のことなので、言葉の上でも文化の上でも支障はなかった。英語のような際立った言語の変化や文化の変化は起こらなかった。ただ時代を経るという時間の流れの中で多少の変化が起きたにすぎない。そのことは漢文が、七世紀の聖徳太子の17条の憲法から十九世紀の明治維新の公文書にまで用いられていることをみてもわかる。

仮名文字の出典は『万葉集』が最古の記録である。「万葉仮名」と呼ばれ、漢字を崩し、変形し、簡略化して作りだしたもので、意味は持たず、一字の中に音の働きを持つ表音文字である。意味を持つ名詞、形容詞、動詞等の漢字とともに表記され、助詞や動詞と形容詞の語尾変化(屈折)を示すのに使われ

た。同様に〔カタカナ〕から〔ひらがな〕が作られ、〔漢字ひらがな交じり文〕が私文書に使われ、公文書にも利用されるようになった。明治時代に一時漢文が隆盛になったが、また復活して現代に到っている。〔漢字カタカナ交じり文〕は、明治時代の公文書に用いられ、第二次大戦ごろまで使われたが、それ以後は〔漢字ひらがな交じり文〕に取って替わられた。

現在、日本語に大きな変革の波が押し寄せている。国際語としての英語の影響が強くなり、英語の単語がどんどん日本語の中にはいつている。和製英語も生まれ、本来の英語の意味からはずれて使われているきらいもあるが、国際化に向かって進むのは歴史の必然だと思う。日本に来る外国人も多くなり、外国へ出かける日本人も増え、国際交流が盛んになり、新しい文化が生まれているのだから。また他の国の文化を知って初めて自分の国の文化の良さが理解できるようになるし、外国語を学んで初めて日本語の美しさすばらしさがわかるようになる。

4. 日本語と英語の構造および人と文化の特徴

ここで言語構造から日本人の特徴と英国人の特徴を考察してみたい。英語は屈折の少ない言語である。語形はSV, SVC, SVO, SVOC, SVOOの5文型からできている。5文型ともに主語が先頭に来て、続いて動詞が来る。主語は省略できない言葉である。屈折がおきるのは動詞が主で、名詞の単数形が複数形に変わる時と指示代名詞ぐらいである。また英語は一語一音節が原則となっている。

日本語は膠着語に属し、語形変化が著しく多く、動詞だけでなく形容詞も屈折する⁽⁷⁾。しかし単数形と複数形の区別はなく、主語も必要ない。一語二音節以上である。文の語順はSV, OV, 修飾語から被修飾語が原則で、動詞が最後に来るのが特徴である。例えば「(だれが)、何を、どうする」など。その他の語の語順は定まっていないので、互いに置換が可能である。例えば、「私はあした早く起きる。」の場合、主語は言う必要がないのと動詞が最後に来れば、残りの語順は換えることができる。「あした早く起きる。」「早くあした起きる。」の2通りの表現が可能になる。また助詞(ね、よ、か)を付けることで疑問、感動、反語、希望など心の動きを伝えることもできる。「あしたか?」、「あしたよ!」「あしたね。」のように。声の高低で話し手の感情が出せ

る。もう一つの大きな特徴は敬語が存在することである。このように日本語は規則にしばられることなく自由に作れる融通無碍な言葉である。

しかし反面曖昧模糊としていて捉えどころのない言葉ともいえる。使用する際にはどの言葉を先に持っていくのか、どれぐらい丁寧な言葉にするのか、敬語はどうするのか、迷う事が多く、話し手の高い言語応用能力が必要な言葉である。聞く人は最後まで待たないと肯定形なのか否定形なのかかわからないし、どんな動詞がくるのかかわからないので、英語に比べ、自分の意見や考えを頭の中で先に組み立てておくことが難しい。自由な言葉だけど論理的に構築するのが難しいので、日本人は意見を述べたり、議論を戦わすことが不得手なのかもしれない。

読み言葉として聞くことの欠点を補っているのが漢字という視覚的に語の意味が掴める言葉の存在ではないだろうか。どんなに難しい漢字でも偏や旁からある程度の意味と読みをほとんどの日本人は連想できる。どんなに難しい話しでも漢字を媒介にすると暗黙のうちに了解することができるのである。

日本に「聞く文化」が育たなくて、「見る（読む）」文化が育ったのはこの日本語の特徴による。漢字という表意文字が生み出す豊かなイメージの世界が日本人の世界なのである。言葉のいらぬ世界、すなわち象徴の世界—精神の世界である。それを如実に現わしているのがお茶、お華、禅などの日本文化ではないだろうか。また俳句や短歌ではないだろうか。昔、平安時代には和歌は声を出して歌うものであった。大和言葉の美しい柔らかない響きを楽しんだのである。表音文字による「聞く文化」が存在したのである。今はイメージの世界に遊ぶことが文化の特徴となっている。

日本語に比べ英語は主語と動詞である程度の内容がわかる言葉である。「だれが、どうする、何を」のように。効率のいい言葉である。文型も語順も決まっているので簡単に文を作る事ができ、人の話しを聞きながら自分の意見が構築できるのである。「だれが（何が）どうする、どうしない」と主語と動詞を聞いただけで話しの粗筋や展開が推測できるのである。後は強くはっきり発音される単語を聞き取るだけで大体の話しが理解できるのである。英語圏の文化の特徴として詩の朗読会やオペラが盛んなのはきっとこの言葉の音やリズムを「聞く文化」だからなのだろう。

このように言語の性格の違いが、文化の違いを生み出した。そして考え方の違い、人間性の違いまで生み出すことになった。

《注》

- (1) John Lyons, *Language and Linguistics* (Cambridge University Press, 1992), pp.303-312.
- (2) 日本史の資料はすべて『日本全史』による。宇野俊一その他編集 講談社 1991
- (3) 大野 晋『日本語の起源』岩波新書 1994, 『日本語以前』岩波新書 1994
- (4) Michael Garman, *Psycholinguistics* (Cambridge University Press, 1991), p.33.
- (5) *Encyclopaedia Britannica* (Encyclopaedia Britannica, Inc. 1974), p.866-877.
- (6) Gary Buck, *The History of the English in Simplified English* (Eichosha, 1991)
- (7) 大日本百科事典『ジャポニカ 3』(小学館, 昭和 55 年)
- (8) 安井 稔『英語学概論』(開拓社, 1989)
- (9) John Lyons, *ibid.*